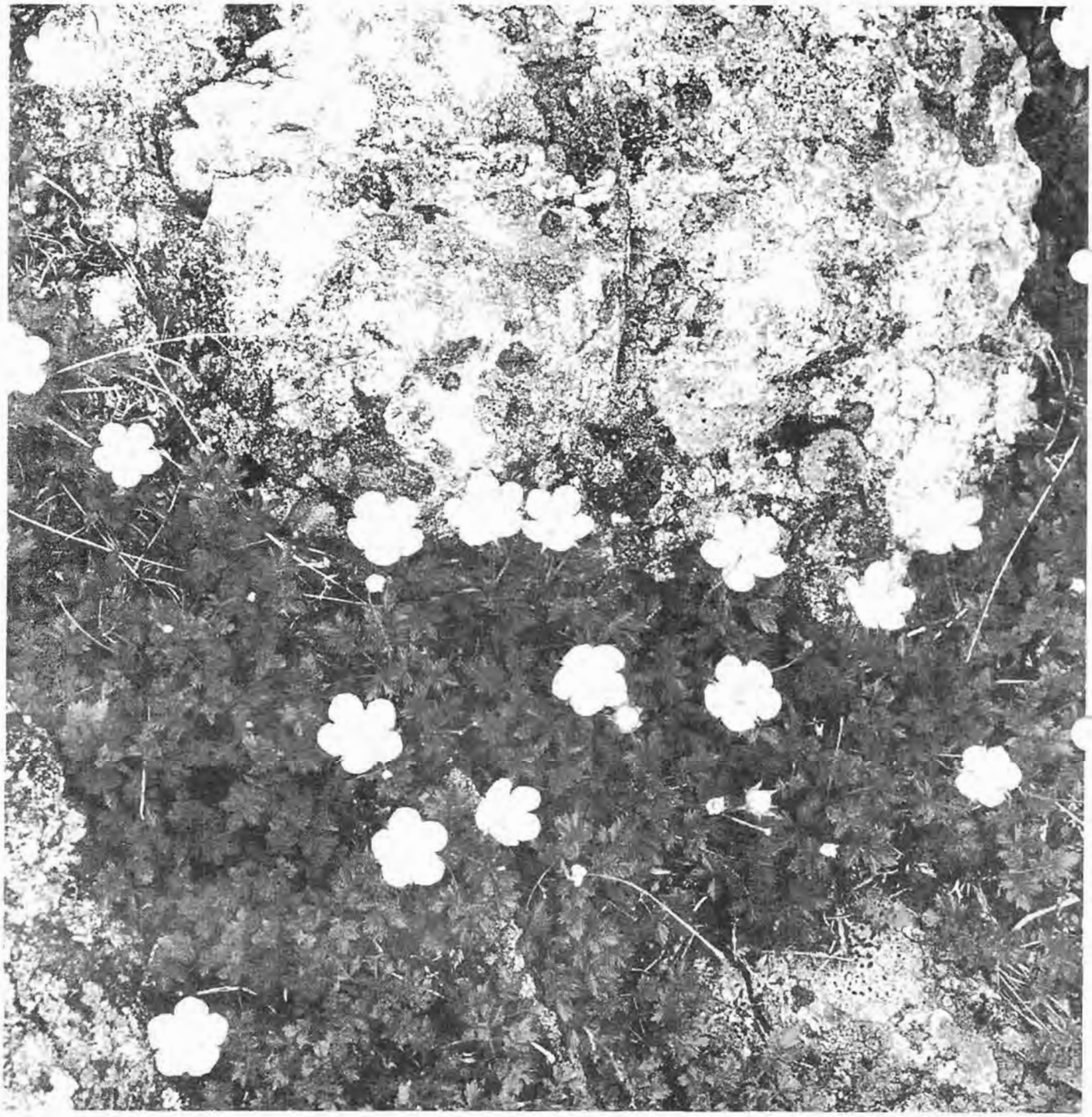
中川根ふる里通信

＝第66号＝

中川根ふる里通信
昭和61年4月20日創刊
編集・発行・連絡先
〒428-0313
静岡県榛原郡中川根町上長尾
TEL. 0547-58-0015 859-6
郵便振替口座 00870-4-81556



南アルプス主峰赤石岳に咲いた可憐な花

ことしの南アルプスの花々の美しかった事、特に荒川カールの花園は素晴らしかった。

お茶あれこれ―第三回―

文学に現れたお茶―その一―

静岡市　石塚幸男

あかときのめさまし草と比をこそ
見つつ笠してわれを思はせ（『蕉集』一二）

（明けゆく日を覚ますきっかけとして、ながめられたいものだ　眺めておいてになって私をしのんでくださいの）

この「めさまし草」はなんだろう。専門書には「目覚ましの時の品物。又は品物…」、「見て目をさますための品。又は料の意…」とある。また「くさ（種）は種類・たぐい・衣類やその他の物品…。料は器具・衣服・飲食物など何かの用に当てる物。ある物事に使用する物」とあり、どうもよく判らない。

以前、これを「お茶」に見立てたいということで、東北大学文学部国語研究室の助けを借りてみたが、これまた文献的に例がなく、無理というご託宣だった。

もし、「めさまし草」を「お茶」だとすると、万葉人もお茶を飲んでいた、と想像できるし、「お茶」の歴史も定説をさかのぼることになっていたが…。また、これが「お茶」と決めつけると、文献上最古の例となるのだが…。残念！

かつて私は小説の中に現れたお茶を調べたことがあった。『生活を楽しむ茶』（第一法規出版）。

"小説は人生の縮図だ"というが、それを調査してみれば、日常生活におけるお茶がいかなる役割を果たしているかが分かるだろうと思ったのである。案の定、いろいろな「お茶」が出てきた。

実例を挙げてみよう。

生活。よい仕事をしたあとの一杯のお茶を喫する。お茶をあびるほどにきれいな私の顔がいくつもいくつも映っているのさ。どうにかなる。

（太宰治『晩年』）

これはもう説明不要だろう。

故檀一雄の小説に『リツ子・その愛』『リツ子・その死』という名作がある。作者が、昭和十九年六月から二十一年四月、リツ子夫人の死に至る二年間のことを書いている。「続く二冊のこの長編小説は戦後の日本文学の生んだ名作で…戦前・戦後の世相を克明な筆致で描き、妻と子を抱きながら、生の再建と世相を描いた」（『日本近代文学大事典』講談社）と高く評価されている。

このたび、本文執筆のために「お茶」が出てくる箇所を、場面で数えてみた（一場面で何度かお茶が出てくるが、あくまで場面として）。数え落としがあるかも知れないが、十四場面である。

まず、昔昔ありリツ子が一粒種、太郎の病気の場面に登場する「お茶」を取り上げてみる。

「いいのかしら？」「いいさ、こんなものだろう」

私はその太郎を抱き上げながら、小児の生命の現金なうつり変わりに驚くのである。

母がお茶を持って座敷に入ってきた。「お母さま、昨晩は――。まるで夢のようになおってしまいましたよ」リツ子が母に云っている。

「よかったね。でも、そんなものよ。死ぬ、なんかと一雄さんがさわぐから、昨夜は私もちょっと心配になったけれど」

十人の母にはかなわぬのである。朝の陽差しが素晴らしかった。陽差しの縁側で母は茶を入れながら、

「お陰で早苗の話もまとまったようですよ」「それはよかった。いつにするって」「なるべく早くと思うのよ」「それがいい。でも僕には

式には間に合わぬな」ゆっくりと茶を啜る。これで心おきなく旅立てると、しみじみありがたいのである。

太郎の奇跡的な回復、ホッとする回りの人たち、心に余裕が出てくると、話題も広がる。そして「ゆっくりとお茶を啜る」。言ってみれば「安堵の茶」とでもいったらよかろうか。

次にリツ子に病意が深く浸潤していって苦しむ場面を取り上げてみる。

我に還ってリツ子の姿をじっと見た。ハッハッと呼吸は短いが、次第に平静に帰ってゆく。おていさんが答えている。

「済みませんでした。脳をやられたようで」と私は、毛布を掛けてくれるおていさんにそう云った。……中略……

「どうやら落着きなさったようだすな」おていさんはそう云った。私はリツ子の口に自分の耳をそっとあてて、もう一度呼吸を確かめた。早いが静かな呼吸に変わっている。

「おていさん、太郎の脳でしばらく横になっていて下さいよ。どうせ私は今夜は徹夜だから」「そうですな。お茶を飲みなさっせんな」とおていさんは立上がって火鉢の火を掻き立てると、それから静かに私の前へお茶を汲んだ。私は有難く茶を飲んで、一服煙管の煙を楽しむのである。

もう安念も何も消え失せた。確実な生死の現場を心の中にしっかりと畳みこむ心地である。後りに私の齢があるならば、よし、この二十年を正確に生きてみようと、謙虚にそう思って顔を上げた。

もう一服茶を啜る。

リツ子は断末魔の苦しみ後の束の間の小康状態である。「どうやら落着きなさったようだすな」といっておていさんの言葉をきっかけに一同ホッと安堵する。「お茶を飲みなさっせんな」という心遣いに「有難くお茶を飲」む。お茶を啜り、ゆっくりと紫煙をくゆらす。「私」にとって、回りの人にとって、束の間の、宝石のような「いこい」である。「私」は「もう一服茶を啜」り、回りの人と「安堵の心」を共有するのである。

さて、お茶がなかなか小粋に使われているような場面がある。

作者一家がリツ子の病気静養先へ引っ越した先に、リツ子の遠縁に当たる静子――作者が思いを寄せるようになる――が現れる。静子が全く当惑し切った顔である。太郎一人チョロチョロとその火鉢の脇に上がっていた。

「手土産も持たずに、上がられんとよ。静ちゃん御免ね」なる程、例によってずぼらくしの手土産を携えて来るのを忘れていた。リツ子は貧窮の我家を考えた上で止めたのだろうか。私は、全く思いがけなかったことである。

「まあ、お土産やら、恥かしさ。そげなものがいただかれますもんか」恥かしさとは、何の意味の表現だろう。この土地の云いならわしか、しばらく不思議な云い廻しに私は驚いた。けれども、その言葉のふしぶしが、素朴な感動のまま、きびきびと私の心に伝わった。

「うちょっと上がっていただきましょうのっ」とようやくリツ子はそう云った。私は嬉しかった。リツ子と私は長火鉢の脇に太郎をはさんだ。私達が上がって終っても、静子はやはり落着かず坐らない。時折、坐っては茶を入れ、茶を入れては、

「もう、おばあちゃんが」を繰りかえしている。それから、ふと気がついたふうに、

「あっ、坊っちゃん、良かもの、ありましたとだすよ」あわてて長火鉢の火を掻きのけた。……カンカン中はおこっている。それを全部周囲に除けていって、真中を掘ると、大きな薩摩藷が二つ埋けられてあった。

どうだろう、この少女の挙動は…。静子は完全に上気しきっている。お茶を入れる動作と同じセリフを繰り返す動作は、少女の素朴さと純真さを物語っている。少女もまた、こうすることによって、心に落着きがもどってくるのである。そして、この出会いが、作者の心を揺さぶり始める。この「お茶」はその場面をなめらかにする潤滑油にもなっているとも言えるのではなかろうか。

潤滑油といえば、次のようなシーンはどうだろうか。

静子が、ぜひ話を聞かせてあげて、と懇願して連れてきた桜井可也という青年を作者に引き合わせる場面である。

「じゃ檀さん。お願いします」そう云い一ツ首を垂れて急に静子が帰ろうとするので、

「いいじゃないですか。一緒に上りませんか。リツ子もいるんだから」

けれども静子は上る模様ではなかった。服装も久留米絣のモンペである。

「北崎さん、肩難り」青年はそう云って淡泊に静子に一ツ礼をした。

「じゃ、又きます」静子が帰ってゆくのである。青年は部屋に這入って、キッチリと膝を合せ、病臥のリツ子に鄭重な礼をした。リツ子があわてて背をおこしながら対えている。

「御無礼します」とそれを又繰りかえして云っただけだった。私が茶を入れようとすると、

「先生。茶は要りません。水を飲みつけとりますす」あわててそう云ったが、それでも入れて、出すと、急いで手にしてその茶を口一杯にくわえゴクリと喉をうるおした。その緊張の姿から、久しぶりに初い初いしい青年の純潔を感じるのである。

コチコチに緊張している青年。「茶は要りません」と言いながら、「急いで手にして」「茶を口一杯にくわえゴクリと一飲む姿。それを初々しいと感じる作者…。「ビール」が「お茶」を媒介にして、青年はリラックスしてゆき、作者は好ましい印象を受ける。まさにお茶＝潤滑油である。

以上『リツ子・その愛』『リツ子・その死』から、お茶が登場するシーンを見てきたが、例えば私たちの日常生活は、緊張と弛緩の繰り返しのリズムから成り立っているのではないか。その間を縫ってあるときはさりげなく、あるときは露に現われるのが、お茶であると言えよう。してみると"小説は人生の縮図だ"とすれば、「茶」は"人生の演出家だ"と言える場面を持っているだろう。

そういうわけで詩を一つ。

一杯の茶

卓の上の茶碗に、急須から注いだ一杯の茶が、
いつの間にか空になっていた。
誰もいないのに誰かが飲み干したように。
「何言っているのの目りたお飲みになったのに」
冬の陽の溜っている障子の
引手の桟をたたくかすかな声がある。
「えっ？」
私はびっくりして（きき返）したがもう何も聞こえない。
ひっひっ日いひりが揺めくばかりだ

（たり冬彦詩集『蛇ぬけ』より）

第ナトヒ号につづく

東京のかたすみから（三九）

テレビの始めから終りまで

取り違い放送

渡邊實夫

患者を取り違えて手術してしまった医療事故の新聞記事を見るたびに、私の現役時代に、現場中継の電波を間違えて放送し、大騒ぎしたことを思い出す。

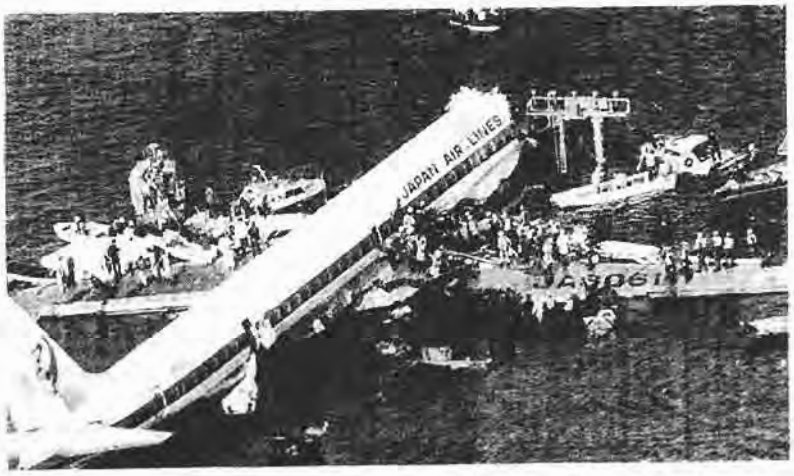
昭和五七年二月九日朝、福岡発の日航機が羽田沖で墜落した。到着予定時刻八時四十分過ぎ、「羽田空港の管制塔との交信直後、突然異常な降下角度で進入し、滑走路まであと数百メートルの位置で、海中に墜落」との第一報がデスクに入り、緊急出動して中継態勢をとった。

テレビ朝日では、早速「ANN（オールニッポンネットワーク）報道特別番組」を編成した。ANNブループでは、小型携帯テレビカメラ（ENG）を駆使し、ヘリコプターによる情報活動の日常化で高い評価を受けはじめた頃であった。――下写真参照――

さて、羽田沖の現場中継の映像が写しだされた。よく見ると機体は浅瀬に横たわり、大破した機首部分は、機体に食い込むような形で半ば海中に没し、右翼は付け根付近から折れていた。（死者および重軽傷者百七十人を出す大事故であった）これを実況放送していた。

私も機首のなくなった無残な機体と悪夢のようなクローズアップの映像に見入っていると、現地で取材しているアナウンサーの声が入ってきた。

その声を聴いて、「あれ！あの声は……」とわれわれは、みんな己の耳を疑った。全く聴き慣れない声ではないが、よく聴くと他局の有名なアナウンサーの声で、これには驚いた。



昭和57年2月10日 羽田沖日航機墜落 読売新聞

「フジテレビのアナウンサーの声だ」と誰かが大声を上げた。

全く予期しない、考えられないことが起こったのである。

私は一瞬戸惑ったが直ぐ、中継ルートの間違えが原因と考えて、フジテレビのアナウンサーの声をカットして、自局アナウンサーの声を取るように手配した。

本事件の映像と音声は右下「羽田ー東京タワーマイクロウェーブルート図表」の図表で示す経路をたどって局に届けられていた。

すなわち、滑走路の端に仮設した中継車のカメラと、マイクロホンで拾った現場の映像と音声は、マイクロウェーブ（無線）

羽田空港→東京タワー マイクロウェーブルート

で東京タワーへ送られ、次に地下ケーブルで六本木のテレビ朝日のスタジオへ運び、そこで初めて番組として制作し、放送で流すという方法をとっていた。

実はこの時、フジテレビの画・音の入ったマイクロウェーブを東京タワーのテレビ朝日の受信装置で受けるという、大変な取り違いをしてしまった。そしてこれを番組として放送してしまったのである。電波法・放送法・著作権法に抵触するかも知れないことをしてしまった。早速、上層部がフジテレビへ陳謝に上がり、ことなきをえた。

大事件は時として続けておきる。前夜のホテルニュージャパンの火災では、地上での密着取材と上空からのヘリコプターによる俯瞰撮影に成功し、初動体制の速さと出色の取材方法で『ANNスタッフ』は高い評価を受けて、他局を制し自信をつけた矢先の出来事であった。

報道現場は緊急事態が発生すると混乱し、修羅場と化すことは、日常茶飯時である。これを手際良く処理して、一刻も早く真実を正確に国民に知らせる義務を負わされている。

ここで言い訳をさせていただけるとすれば、この時は墜落機の『折れた胴体』を、テレビ各局が同じ場所の各中継車からカメラで撮影し、アナウンスを入れて、中継用のマイクロウェーブの送信機で、同じ東京タワーに設置した夫々の局の受信装置へ送るという作業をしていた。

特にフジテレビとは送り出し場所の滑走路、受け取り場所が東京タワーも同じで、一点から送り出して一点で受信しているようなものであった。

現場の映像の内容も『折れた胴体』を撮影するものだけで、全く同じ絵図らであるため、瞬時には自局か他局かの判別は難しかった。

当日、マイクロウェーブ受信をやった同僚は、上役から「映像が来たらなんでも受ければよい、と言うものではないんだ」と、一喝されたとこぼしていた。

本事件以降、テレビ局で混線を起こす恐れがあるとき、映像の冒頭に日局表示「こちらANNテレビ朝日」のプレジットカード（名札）を入れて、同種事故の再発防止に備えるようになった。

この番組本は失敗談は当時のアナウンサー幹部にも秘密で、社史にも掲載されていない。今、生き残っている私と、東京タワー勤務の技術者、報道担当者しか記憶にない秘めごとになっているしかし、当時、この番組の視聴者の中には、気付かれた方もあったのではないだろうか。

付記

※ 現在のマイクロウェーブ中継装置は、周波数が確実に保たれているため、他局を取り違えるようなことはない。

※ ANN＝テレビ朝日ニュース取材網、ネット系列連帯の旗印。
NNN＝日本テレビ系列。
JNN＝TBSテレビ系列。
FNN＝フジテレビ系列。

二〇〇三年（平成一五年）八月　記

（余録）思い出しました。この時流行語になった言葉
『上州剛腕長谷川病名』は神戸一
横井社長　言葉　ニュースは報道はワルい一

プロジェクトシリーズ第五部

寸又峡翠紅苑作業所の思い出

大村勝枝

昭和六十四年(一九八九年)一月上旬、昭和天皇が崩御されて一分間の目禱をささげていた。「月禱終り」の号令で目をあけ頭を上げた。

私はこの時、㈱間組名古屋支店建築課、奥大井観光ホテル翠紅苑作業所の現地採用で、事務員として勤めておりました。この頃はまだまだ高度成長期であり、土木・建築とも次々と発注され毎日真剣勝負のような現場の下で一生懸命頑張った。昭和から平成という新しい年号に変り、複雑な気持ちの中にも新しい時代への希望と夢がわいて、忙しくも活力ある日々を過していました。

「あっー！あんた、そんなかっこうじゃ危ないぞ！」と二村主任がどなった。「ここは足場だからね、足に〝くぎ〟がささるぞ。」と指を足元に向けて指した。「すいません。」と頭を下げると「何か急な連絡か！急いでなかったら来るな！五分後に連絡すると言ってくれ！」と鉄筋組みをしている人や、セパを溶接している人のそばで叫んだ。建築の現場はものすごい音で耳がわれそうだ。それから私用の半長靴とヘルメットが支給された。そういえば大工さんが足にくぎがささり、荒療法で五円玉にマッチの硫黄を削ってのせ、火を付けて消毒していた人を見たばかりだった。くぎは化膿しやすいからやっかいだ。

その頃は携帯電話など電波も届かず使用されていなかった為、事務所には四・五台の無線器具が接置されていた。

＝感度あったら応答願います＝どうぞ＝何時何分〇〇に連絡して下さい＝はい了解しました＝どうぞ＝と職長さん達の通信が常に流れていました。だから静かな中といえば昼休みの時だけだった。

毎日午後になると協力業社の方々の検討委員会や安全会があり、その資料作りに多種多様の図面焼き、工具の説明書等を何枚も焼き、必要部数を確保した。

又、大変だったのが昼の弁当と夕食の数、これをまちがえたら大変、作業者から雷だった。紺色の線の入ったブラウスにベストとブレザーの制服にあこがれて私もまだ気が若く、スタイルなど気にかけていましたが、あまりの忙しさと常に危険な場所の配慮を頭の中で考えて行動せねばなりませんので、それどころではありませんでした。

とても緊張し一日が終るとぐったりしました。特に紅竹食堂の波多野さん夫婦や家族の方が朝・昼・夕の食事の世話をして下さり、遠い地方より出かせぎに来ている人達に家族のようにしてくれ、皆な頼りにしていました。

翠紅苑建築中は寸又峡の旅館や民宿に泊る人もいたし、現場泊りの人は、ホテルアルプスの温泉を利用させて頂き助った。寸又峡の人達は人情が厚く親切で頭が下った。

私は地元通勤で、車で分位かかり、寸又川の下流にあった。工事前の低い方の道を通っていたが、早い時でも帰りは午後六時過ぎだった。中学と高校へ通学する子供と、八十才を過ぎ

基礎・捨コン打設、手前のあかね亭 静岡市、大川八草の旧家を望月恒一さんが買って移築したものです。

た義母もおり、主人は千頭営林署の北千頭担当区事務所に勤務していた。でも家の者も皆な協力してくれて大変助かった。

皆なほんとうに親切にして下さった。私は生まれつきおっちょこちょいで、早とちりしてしまうくせがあり、とんちんかんな表現をすると、それがとってもおかしいらしく、「食事の時は必ずあんたのことが話題に出るよ！」と海野所長が笑って言った。やっぱり明るく楽しく働く方がいいですから、明るさだけは誰にも負けなかった。若衆にもきちんと話をつけて、一日の仕事を行ってもらっていた。「大村さんサーン下さい。」と一日の仕事が終了すると日報を出しに来てくれた。「御苦労様です。」――御苦労様は現場の〝合言葉〟、電話でも同じこと、出会った人には声をかけてあげた。それが遠く地方より出て来た人達はうれしかったのでしょう。

旧大間小学校運動場が朝礼の場所となった。

月末の〆切りの日が近づくと業者から出来高請求書が提出された。消費税3%の時代だった。出来高の打ち込みは海野所長が時間をかけて教えて下さった。所長は若いからテキパキと機械を使うが、私はもう四十ニきになって初めて覚えることでむずかしかった。大学出の人って頭がキレてスゴイなーーといつも所長や二村主任に感心した。

ある時、二階の事務所が地震のようにゆれ、ドーンとものすごい音がしてショックを受けた。「大変だ大型クレーンが倒れた！」と二人とも階段をとびくずれた。中庭の地均し後の地盤がゆるく鉄筋を中吊りにして倒れそうに斜めになっていた。皆なびっくりした。大洋建設の茂川さんが口びるをガクガクさせて「すー・すいません。」と二階の事務所にはいあがって来た。「おい大村さん、茂川さんをゆっくり休ませてやってくれ。」と主人が叫んだ。「怪我はありませんか。」体の震えが納まらない様子に気を配った。運転手は倒れると感じ、とっさに飛びおりて大丈夫だった。幸いクレーン下の円形内（クレーンが動く円内）に人がいなかった為無事だった。皆なホッとしたが、静岡営業所と名古屋支店に海野所長が連絡した。翌日名古屋支店労安部の樋口部長が来所し、安全衛生委員会の時、注意や反省事項等いろいろ安全指示があり、監督者は大変だったようでした。

寸又峡温泉は山に囲まれ春の新緑、秋の紅葉はすばらしいところですが、冬は太陽が遅く出て、早くしずみ、底冷えがして寒かった。コンクリートを捨コンして均した後、モルタルを塗りクラックが入らないように夜は注意して眠らず巡回したとか、大変だったようです。

寸又峡翠紅苑作業所、2Fの事務室にて、職員は5人。上段左より、二村主任、増田君、海野所長、大河原建設より出向の人。下段、左より客人、大村本人、客人（名古屋支店の事務員さん

平成元年五月六日に上棟をしまーした。あかね亭

だけは残っていたので、その会場で祝をした。東芝空調、中原建設、大河原建設、成沢木工、扶桑工業、菱電商事、河畑工業など合せ四十三社の協力業者の方々でした。

交通公社トラベラントの人達も時々おとずれ各部屋の名称等を検討して、支配人様はじめ昔流儀のわかる方に見て頂いたりしました。

皆なそれぞれの役割りで無事に働いたおかげで九月には玄関側の棟だけオープンお来そうですよ。との事でした。

藍染館、紅葉館、竹翠館も誕生、レストラン（はいから亭）大浴場（白珠の湯）べんがら亭は風調ロマンをよそおい、くちなし亭、あかね亭とそれぞれ日本風古来の宴会場を作り、全く新しい感覚の山の宿とし、古代色とテーマに民芸風、現代和風、レトロ調などバラエティ豊かな施設が完成しました。

夏のじりじりした暑さの中、関係者方々、地元協力業社方々、多勢の人達ご竣工式後お祝をしました。完成の喜びと感激でいっぱいになり涙がおちました。海野所長も初めて所長になった工事が、多勢の人達にお世話になり支えていただいた事に大変感謝しておられました。集まった人々から新装なった翠紅苑の設備、設置について、特に遊園（パディオ）（広小路）はすばらしいと、皆様喜んでおられました。

奇遇にも一九八九年はハザマが明治二十二年（一八八九年）創業されてから丁度百周年記念の年でありました。㈱間組各支店全員と海外スタッフ一同と共に私達寸又峡作業所も職員名簿アルバム特集に出して頂き、その上に大辞典及びアルバムを頂いた時は、ほんとうに喜しく思いました。

南アルプスの麓、山と渓谷に抱かれた秘境、奥大井"寸又峡"へぜひおとずれてみませんか。

完

海野　雅夫 所長　　大村　勝枝さん

HAZAMA FIRST CENTENNIAL ANNIVERSARY ALBUM より

間組100年の歴史より、大井川水系に関係する諸工事の足跡を見ました。（次ページ右下写真あり）

明治34年　大倉組（大成建設の前身）との協助契約を結ぶ。㊟明治43年 東海紙料地名発電所完成

昭和8年　5大電力会社の一つ日本電力株式会社の富山県黒部川第二発電所水路を請負。

昭和9年　大阪市より大阪市高速電気軌道地下線路工事を請負。大井川電力株式会社より大井川発電所を特命請負。大井川流域に発展の素地を作る。昭和21年（終戦直後）久野脇発電所完了。大井川発電所より、久野脇発電所まで導水管（トンネル、水路橋、境川ダム）設置。

昭和28年　日本で初の大規模機械化施工となった電源開発・佐久間ダムを受注。中部電力よりわが国最初のホロー式・井川ダム特命受注。

昭和33年　ホローダムで世界最大とされる中部電力・畑薙第1発電所を受注。東宮御所を7社共同企業体で受注。

七月十二日発行第65号から わずか二ヶ月の間に、ふる里では様々な動きがありました。その中で一番よかった事ずばらしかった事は、第58回全国茶品評会にて水川の丹野浩之さんが日本一になり、中川根町も産地賞を受賞しました。おめでとうございます。今回は丹野さんをはじめ、三十代から四十代前半の若い茶業経営者が大勢入賞されました。その内容が一杯つまった「広報なかかわね臨時号」を読者の皆様にご覧いただきたいと思い、ふる里通信66号の一部として同封させていただきます。"健康に緑茶"と叫ばれてもう何年すぎたでしょう。大規模茶業や外国茶、自販機、ペットボトルのお茶と、小さな川根茶産地はおしつぶされてしまいそうですが、この受賞をはずみに、本物の川根茶業が一層発展する事を願います。（町内の方には重複となりますので、別企画4ページをお届けします。）

総務省のおたっしとする自治体減らしの平成の合併は順調に進んでいらっしゃいますか。特に人口の少ない町村は選択肢は決まっているようなものですから"合併せざるを得ない"を目標に進められているのではないでしょうか。

中川根町も七月下旬から八月にかけて住民を巻き込んだ動きがありました。町の合併方針に議会が納得せず、今までの合併の経緯があまり明かるくない住民に急に意見を聞き（議会側住民投票・町側住民アンケート）それによって、町の方向性（将来）を決める。という事になり、町内三ヶ所で八月上旬一回、お盆を挟んでもう一回と計六回の「合併に関する住民説明会」が計画され、その後、町及び議会が一体となったアンケート実施の運びとなりました。

町の希望する「二町合併（中川根・本川根）」議会側の「合併特別委員会のなりゆき」「二町合併推進派」「一市三町」推進派（島田・金谷・川根・中川根）「合併しない派」の説明がなされ住民との意見交歓もなされました。

ところが・・・・お盆の最中に合併協議会を進めていた「一市二町（島田・金谷・川根）」が合併をしない事になってしまいました。この事は直接中川根町には関係の無い事ではありますが、議会側には「一市二町に入りたいから一市三町」を推進していましたから目標が無くなってしまい、後半の説明会は「状況報告会」となり、三者択一？の住民アンケートは幻となってしまいました。

その後、「中川根まちづくりを語る会」（この様子は第67号でお知らせします）が催されたり、町・議会・住民の接点はありますが、町の将来を決める大切な懸案を「住民の意見を重視し、それに従う」という、なかば無責任な挙動は、他町のなりゆきで「町民の合併に対する意思」を問う事なく、又、議会に戻されてしまった形になってしまいました。

しかし、六回に渡って優れた住民との意見交歓で、議員の皆さんも町民の意思を汲み取ってくれたものと思います。

まだまだお伝えしたい事が沢山あります。今回号に載せられなかった、「大井川を見つめて八十年」「堀の内カルタ」「おしんのモデルのふるさとは」「台風10号の大出水」などは同時発送予定の第67号にてご照会したいと思います。変則な発刊となりました事をお詫び申し上げます。

工事中の大井川発電所第1工区（昭和9年）